

3. 黒部に挑んで

永 森 洋 一

先程から、小野さんは流れの中程にある大きな丸い岩の上に立ったまま上流を見つめていた。増瀬と私は左岸に立って、小野さんの判断を待っている。九月初旬の黒部は早秋の色が深まっていた。背後の岩壁は太陽の光を受け赤茶けた色をしているが、対岸の垂壁は黒々と日をさえぎり、時折、ヒラヒラと黄い木の葉が悲しげに舞い落ちてくる。

ぬれた衣服に身を震わしながら、前進か後退か、迷っていた。何度かの雨に拒まれながらも、ようやくここまで達したピッチは止ってしまったのだ。聞こえるのは唯、せせらぎの音だけ、長い長い無言の時間、やがて小野さんは帰ってきた。

黒部川、それは余りにも大きく、私たちの力は余りにも小さすぎた。昭和38年9月4日、上の廊下数合沢と金作谷の間になる上の黒ピンカ手前の谷が大きく右に曲った所で、引き返さざるを得なかった。山に入っただけで既にひと月近くになっていた。

8月8日、下の廊下の入口、仙人ダムから東沢の吊橋を渡りジグザクの道が水平になる頃から黒部の様相を呈してくる。まずS字峡、そして十字峡、白竜峡と上流になるにつれそのスケールは黒部にふさわしく深く、暗く、雄大なものであった。黒四ダムはほぼ完成していた。見上げるダムは何と言っても高い。満々と水をたくわえる黒部湖は青く人間の力は黒部に等しく偉大でもある。

平の小屋にて、針の木峠を越えてきたサポート隊と合流する。ここから、この合宿の主目的である上の廊下を目ざす訳だ。

翌日、晴れ渡っていたが、台風が日本海上にあり様子を見る為に停滞。

平での二日目。台風は北上を続け、影響なしとみて、出発の準備をしていたが、平の小屋の佐伯さんの話によると東沢迄の関電の道路工事が明日からの盆休みの為、突貫工事になっているとのこと。出発は一日延した。

3日目。朝から雨。台風は熱低となって、前線が発生したのだ。停滞と共に上の廊下へのお出立も断念しなければならなかった。テント場近くのヌクイ谷の

増水からみても上の廊下の水量はものすごいものに違いない。野菜類が腐ってしまっ、食糧状態が悪化、減水迄の食い伸びも出来なかった。

翌日、大町に引き返す為、船窪岳を越え葛へ向う。皮肉なことに前日の雨はやみ、雲一つない青空。熱さにうだりながら、大町行の最終バスに乗り遅れまいと急いだせいか、全員総バテの状態。

晴天はその後4日間続き、その間に食糧を購入、ベースを三俣蓮華に移した。三俣から東沢を下り、上の廊下をアタック、サポート隊は、その間源流一帯の踏査という計画である。

ところが、何というめぐり逢せだろう。三俣に着いた翌日、8月17日、朝から風強く雨がテントを烈しく打つ。前日までの4日間の快晴に廊下の減水を期待していた心は、はかなく打ちくだかれた。その日停滞。退屈しのぎに歌を作った。技研マーチ。「登るも下るもいさましく、担ぐザックは二十貫……」歌だけはいさましく、意気は消沈。

雨は三日間続いた。上の廊下への門はまた閉ざされたのだ。

その後、新人を交じえての穂高岩登り合宿に移る。黒部は一時断念して九月に三度目のアタックをすることにした。穂高でも前半は雨にたたかれた。何んと雨の多い夏なんだろう。何か始める段になると常に雨になる。運に見離されるといふか、全くつきは廻ってこなかった。しかし、後半は天候にめぐまれ、快適なロッククライミングが楽しめた。

9月1日、その年最後のチャンスとして、三度目、上の廊下を目ざして、針の木峠を越える。今度こそ黒部の空よ、雨を呼んでくれるな。遠く赤牛岳を巻くように流れる黒部川に思いを寄せて、そう祈りたかった。願いは通じたのか、針の木峠からの展望は素晴らしかった。ただ、私の体調は良くなかった。穂高合宿のあと、小梨平での酒宴の際飲み過ぎたのか、少々下痢気味で、峠からの下りでは何回も木影に飛び込む始末であった。しかし、そんなことは言っておれない。黒部の門はやっとの思いで開かれたのだ。平にて幕営。

2日。意気揚々と出発する。関電の水平道路はほぼ完成しており、東沢出合まで2時間。東沢を初めての渡渉。太モモぐらいだが、その冷たさに身がちぢ

む。渡渉にはかなりの覚悟が必要であることを思い知らされた。渡渉技術については、何回も武庫川で訓練はしていたが、寒中水泳のような精神的な訓練も必要なようだ。

東沢出合から川幅は序々にせまくなり、行きづまっては渡渉を何回となく繰り返す。下の黒ピンカ手前で空模様があやしくなり始め、高巻きを終えた頃、雨になり出した。だんだん烈しく、ついには土砂ぶりになる。雨の中を渡渉、身体はぬれきっているから苦痛には感じないが、下痢気味の腹は益々悪くなるようだった。滝のルンゼ近くに幕営。

雨は夕方には小降りになったが、乾いていたルンゼが水を吹き出し、本流はみるみる内に水嵩を増し、濁流と化していった。大自然の力というか、わずかに五時間ばかりの雨がこんなにも姿を変えるのかと思うと、その迫力に恐しさを感じずにはおられない。その夜川底をえぐるような轟音はいつまでも耳を離れなかった。

3日。朝、寒さで目がさめる。快晴、前線が通過して高気圧におおわれたのだろう。雲一つない空が地熱を奪い冷えた朝だった。出発していきなりの渡渉、前日の濁流は治まったとは言え、腰までの渡渉はこたえた。口元のタル沢出合より上流は完全な廊下であった。川巾せまく、兩岸高く垂壁となり、はるか上流から白く泡立って流れ込む黒部の水は、その廊下で静かな静となっていた。私の画いた黒部のイメージはここにあった。深く暗い峡谷、上の廊下。

廊下の出口を対岸、口元のタル沢側へ渡渉。最も深い首までの渡渉だった。やっとの思いで岸にはい上ったときは、ガチガチと歯も合わない程の胸震い。急いでタキ火を作り暖をとる。そんなことをしてもぬれた衣服は乾かないが、体温が戻れば苦痛はやわらぐ。衣服は体温で乾いてくれる。渡渉の度にぬれ、その度に体温で乾かし、乾いた頃に渡渉が始まる。沢登りとはこんなものだ。カロリーの消耗ははげしい。

わずかに踏みあとを残している東信歩道ぞいに高巻き、廊下沢出合近くに幕営。

4日。いよいよ上の廊下核心部に入る日だ。数合沢右に見て30分、右岸を

高巻き、アップザイレンで降りたところ、男性的な偉容に目を見はった。高い岩壁に囲まれ、その間を荒々しく黒部は流れる。右岸を少しへつり、行きづまって左岸へ。段々状の岩の上を、上ったり下ったりしながら先へ急ぐ。そして右に大きくカーブした点で行きづまる、流れの中程にある大きな丸い岩の先6mは深く流れは早やかかった。とても泳げそうにもない。小野さんはその岩の上で長い間、立っていたのだった。

春からこの黒部を目ざして、六甲へ、大峰へ、丹波の山々へ、あるいは武庫川へ、岩登りと渡渉の訓練に何日費やしただろうか。全てを賭けてここまでやってきた私たちだったが、この黒部の水量には勝てなかった。

残念と言うより、私は黒部に圧倒され、ひと月近い山での生活で身体は弱りはて、精神的にも肉体的にも打ち負かされた感じだった。運にも恵ぐまれなかった。雨また雨で平年の水量をはるかにオーバーしていた。翌年の第二次黒部合宿では、この地点を楽々と水の中をへつり、通過出来たと聞いている。黒部遡行の成否はその水量がカギである。

8月の7日に大阪を立ち、9月の8日に大阪に帰る長い山行だった。失敗したとは言え私には最も印象に残っている合宿の一つである。何故かしら、目的を達せなかった山行ほど、豊かな思い出として頭に残っているものだ。私が一年のとき参加した知床合宿もそうだった。地の果て知床で雪と氷に閉ざされ強風にあおられた毎日も、ありありと頭に浮んでくる。苦しめば苦しむほど、失敗すればするほど、そこに努力と情熱がある限り、充実した豊かな時となるのは人生においても同じであろう。

S・46・4・18 記